

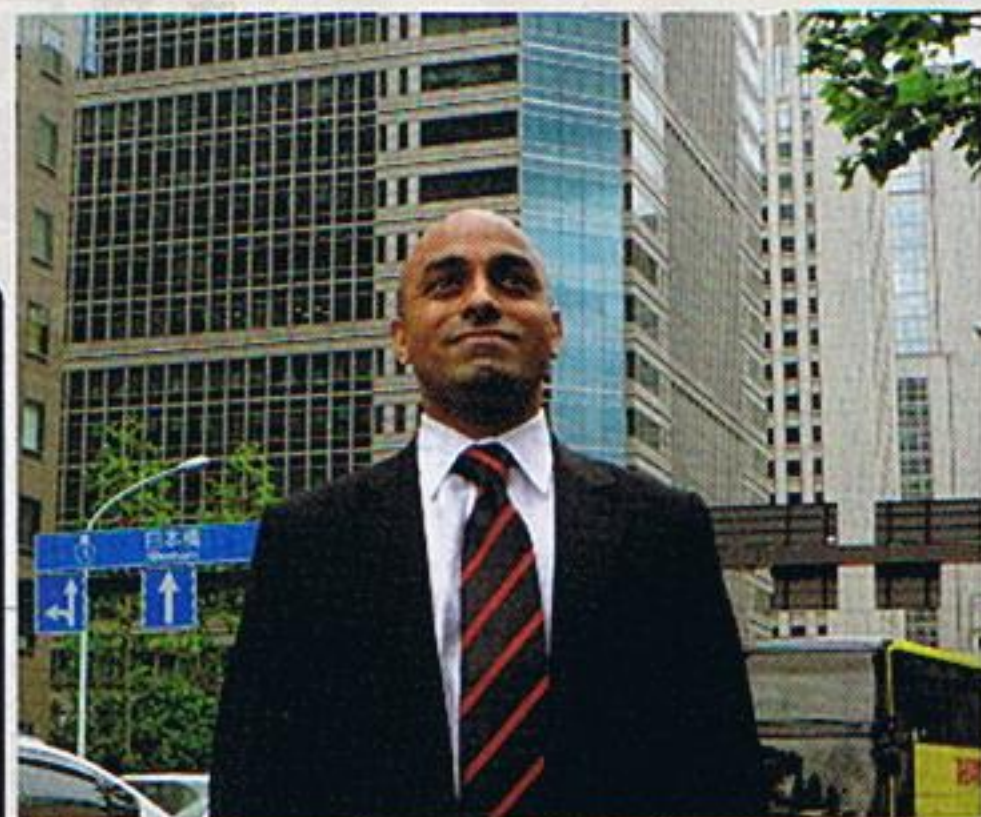
## インドの若き頭脳が日本で独立 日印ビジネスの懸け橋目指す

日本企業に雇われる外国人ばかりではない。日本でビジネスチャンスをつかぎ、独立を模索する動きもある。それも日本にとつての活力になる。ここでは一人の若きインドの俊英を紹介する。

**サ** ンジーヴ・スィンハ氏が、日本に降り立ったのは一九九六年、二三歳のときだった。横浜市にある人工知能(AI)研究の会社があるインドの新聞に人材募集の広告を出したのが目にとまったのだ。

その会社は最先端の技術を有しており、大学で物理学を専攻したスィンハ氏の好奇心をかき立てた。ところが日本となるとまったく別。知っている日本語といえば、インド映画ではやった「サヨナラ」ぐらい。ハイテクの国というイメージはあったが、それ以上の知識はなかった。

現実は大変だった。食べ物になじめず、友人もいない。インド人の会社員も珍しく、「どうして日本に来たの」と聞かれるたびに、「飛行機を乗り間違えた」と返していたほどだ。転機が訪れたのは九八年。突然、ヘッドハンターから、「外資系証券会社でデリバティブ関連ビジネスのポジションが空いている」と誘われた。デリバティブは、リスク管理の仕組みが複雑なため高度な金融工学



金融業界と決別し、コンサルタントに転身。「日印関係のビジネスの発展に貢献したい」とスィンハ氏

の知識を持つ人びとが商品開発に携わっており、深い興味を抱いたのだ。金融マンとしてのキャリアを歩み出したスィンハ氏。その後、米系や日系の証券会社などを経て、スイス系のUBS証券では「ディレクター」

の肩書も得た。仕事内容も、当初のリスク計量などから、アナリストや管理部門の仕事まで任されるなどスナップアップ、それに伴って年収も増えた。日本語能力も日系企業で働いたことで飛躍的に向上した。

### 強みはインド工科大人脈 同窓会の日本代表務める

仕事には満足していたスィンハ氏だが、この五月からさらなるチャレンジに向かって走り始めた。証券会社を辞め、日本とインドのビジネスの橋渡しをする「スィンハ・コンサルティンク」を設立したのだ。

「インド人の多くは欧米を向いている。日本企業は今、インドに興味を持ち始めているが、日印関係はまだ発展途上。この二カ国のあいだの懸け橋になりたい」と目を輝かせる。

最大の強みは、在日インド人の人脈にある。インド最高峰のインド工科大学(IIT)同窓会の日本代表を務めており、約二五〇人の同窓生を取りまとめる立場にいる。その多くは金融やIT関連に従事しており、日本でもインドの頭脳が強力なネットワークを形成しているのだ。

余談だがIITの授業はプレッシャーの連続という。抜き打ちテストは序の口、教わっていない問題が出たり、C言語を翌週までに覚えるよう求められたりと、「サバイバル能力が鍛えられた」と笑う。

スィンハ氏の頭の中にはビジネスプランが描かれつつある。たとえば日本参入を図るインド企業にとって、言葉以外にも文化や慣習が障壁となる。逆に日本企業がインドに進出しようとしても、地域ごとに違うインドの事情まで精通するのは至難の業だ。こうした企業にコンサルティンクのニーズがある。

若くて優秀なエンジニアが無数にいるインド。天然資源もあり、消費市場も急拡大中だ。インド側も日本の資本やインフラ投資に期待が高い。これらをどうつなげるか、スィンハ氏の前に大きな夢が広がる。

インド工科大学(IIT)にセカソある最難関の大学。三〇万人受験し合格者五〇〇〇人の狭き門で、世界中の優良企業に人材を輩出している。